

ぼくはトーマス（完結編）

水田 まり

トーマスよ今日の散歩は長いのだ道草せずに
真すぐに歩け

ぼくはお父さんが耳元で囁くこの一首を聞きながら眠りにつこうとしていた。これからどこへ行くのであろうか。そう思いながら目を開けようと、どれだけ頑張っても開かないのだ。なにしろ眠いのだ。

そう思いながらまた眠りに陥ろうとしたら、お父さんが「トーマス、さようなら」と囁いた。ぼくは、えっさようなら。どういふことなんだ。さようなら。なんて今までお父さんの口から聞いたことはない。

考えているぼくの耳元へ、美兎お母さんの涙に濡れた声が「トーマス、さようなら、道草なんかしないで、ちゃんと歩くのよ。今日は一人なんだから」
と聞こえてきた。

「一人、一人なんて脱走したとき以外に歩いたことはないよ・・・どうして、一人なんだよ」

深い眠りに着こうとしているぼくの頭は考えた。するとその考えを打ち消すように、「トーマス、さようなら。天国ではみんなと仲良くするのよ」

魚人さんと結婚した羊子さんが、ぼくの頭を撫でながら励ますような凜とした声を出した。

「天国、天国って何だ。ぼくは眠ったままどこへ行くんだ。目を覚まさなければ」

ぼくは必死で目を覚まそうとしたが、瞼は重くて開けられない。これはいつもと違う。今までならどれだけ眠くても、起きようと思えば目はすーと開いたのだ。ぼくは悲しくなってきた。すると今度は魚人さんが、

「トーマス、星になつて僕らを見守ってくれよ。さようなら」

優しい声で言ったのだ。

「ぼくが星に、あの夜空できらきら瞬くお星さまに、ぼ

くが」

散歩から帰ってお母さんと一緒に見た一番星が頭の中できらりと光った。

その光に合わすように、可愛い歌声が聞こえてきた。

「ねんねーんころーりよー おこーろーりよー トー
マは良い子だ ねんねしなー トーマは良い子だーねんね
しなー」

「あつ、琴理ちゃんだ」

羊子お姉さんの一粒種の琴理ちゃんが、子守唄を唄っている、もう琴理ちゃんは五年生なのだ。琴理ちゃんが生まれて一か月羊子お姉さんが実家へ帰ってきている間、琴理ちゃんが泣くと、思い切り優しい声で、わんわんわーんと子守唄を唄ってあげた。すると泣き声はぴたりと止まり、すやすや寝息が聞こえてきた。そのお返しのように、大きくなるにつれて琴理ちゃんははくに子守唄を唄ってくれた。

琴理ちゃんの子守唄があまりにも耳に心地よくて、目を開けて起きようとしていた気持ちはすっかり無くなり、今まで暮らした犬沢家の思い出が走馬灯のように頭の中でくるくる回り出してきた。

ぼくは十五歳三か月で、お父さんの辞世の一首に送られて天国へ旅立った。幸せな日々であった。十五年は長い長い歳月のように思うが、終わってみると、あつ、という間の出来事だったような気がする。ぼくは天国への道を一人で歩きながら、犬沢家の後半の暮らしを思い出してみることにした。

その前にぼくのプロフィールを書くことにする。ぼくの一生の前半を美兎お母さんが小説にして書いている。随分前の話なので、もう一度簡単に経歴を述べてみる。1996年豊橋の生まれで、生後四十日目にS市の某大型スーパ一の一角にあるペットショップにやってきた。四か月に入ったある日、ぼくは犬沢家を買われて家族の一員になった。昔は猟犬であった由緒正しきビーグル犬である。犬は自分の努力では幸せにはなれないのだ。飼主の善し悪しで幸せは決まるのだ。ぼくは犬沢家の一員になって、本当に幸せな十五年であった。十五年の間雨嵐でも散歩を休んでいない。散歩のおかげでお父さんもお母さんも健康が維持できたそうである。繋がれている犬にとって朝夕の散歩ほど楽しいものはない。犬沢家は規則正しい家族なので、時間も守られた。お父さんは会社へ行く前に四十分はいつも歩いてくれた。冬の寒い

日はぼくも起きるのが辛かったから、お父さんは尚更であつたろう。真面目なお父さんだから出来たのだ。夕方はお母さんが万障繰り合わせて歩いてくれた。もちろんお姉さんは会社の休みの日は結婚するまでは、歩いてくれたよ。ぼくはS町の隅から隅までとは言わないが、ちよつと自慢できるぐらいあちこち歩いている。リアス式海岸で有名な国立公園のS町の景観は本当に素晴らしい。

その景観も一緒に入れながら家族と過ごしたぼくの後半の暮らしぶりが今回の物語だ。

この十五年で犬沢家の家族構成は随分変わってしまった。ぼくが四歳の時大好きな羊子お姉さんが結婚して家を出た。お婿さんの魚人さんとも、ぼくはすっかり仲良しになった。隣町なのでよく遊びに来てくれる。

うれしい出来事ばかりでなくて悲しいことも多かった。一番悲しかったことは、お父さんの妹の鳥麻子さんが五十二歳の若さで亡くなったことだ。

癌は二人に一人は罹るという世のなかである。お父さんの兄弟は四人だから、もう一人誰かが癌に罹るという計算だ。足の痛みから始まった鳥麻子さんの癌は手遅れ

で最後は体中を蝕んでいたそうだ。

里帰りをしてはぼくと一緒に遊んでくれた明るい優しい叔母さんであつた。

お母さんが、

「トーマ」と呼ぶと、間違えて鳥麻子さんが、

「はい」と走ってきたものだ。鳥麻子とはまこである。目の大きな美人で、鳥麻子さんに、たまに散歩に連れて行ってもらうときは、鼻高々であつた。美人薄命とは鳥麻子さんのために作られた言葉のようである。ぼくは小さいときから色白で可愛い女の子が好きで、散歩の途中、可愛い高校生の女の子に見とれていて、不覚にも腰を抜かしてしまったのだ。女の子はびっくりして走って逃げてしまった。

鳥麻子さんの葬儀には泊まり込みで家族全員が出かけてしまい、魚人さんが僕の散歩を引き受けてくれた。ぼくはもう子供ではないのだ。一人でも十分留守番は出来るのだ。いつか夜一人で留守番をしていたとき、静まり返った家の様子につきり捨てられたものと勘違いをして鎖を切つて逃げたのだ。行く当てもなく、庭をぐるり一回りして隣家を覗きに行き、そこのお爺さんに見つかつて連れ戻された。そのあと、庭の入口でお座りをし

てじつと皆の帰りを待っていたのだ。そんな経過を知らずに、皆は「庭から出なかったのね、なんて賢いトーマスなんでしょう」と口々にほくを褒めたたえた。あの時の経験で決して家族の皆は、ほくを見捨てはしないという強い確信を得たのだ。

あれは庭の紅葉が赤く色づき始めた晩秋であつた。葬儀のために家族は出かけて家の中はからっぽであつた。早朝ほくの耳に一番のりをするのは新聞配達バイクの音である。その日もバイクの音が去ってしばらく、うとうとしていた。すると門の方から、スニーカーの足音が近づいてきた。ほくは敏感にその音を捉えて小屋から飛び出して、ワンと吠えようとしたが、慌ててその声を飲み込んだ。魚人さんの優しい眼差しがほくを見ていた。「やっぱり、聞いていた通り、トーマスは早起きだ」

そう言うと、手に持っていたリードを首輪にカチャリと着けた。

嬉しくて尻尾をちぎれんばかりに振って魚人さんの周りをぐるぐる回った。二人で歩き出して少し不安が頭を掠めた。お父さんのように、上手く朝のうんちをキヤッチしてくれるだろうか。ほくは魚人さんの顔を仰いだ。

「トーマス、ちゃんと、うんちしてくれよ」

思いが伝わったようだ。魚人さんは仕事があるので駆け足で散歩をした。何時ものぼくら道べりをくまなく丁寧に嗅ぎながら歩く。時には立ち止まって、この匂いは何の匂いかなあーと考える。お父さんはそんなほくを、根気よく待ってくれる。せつかちのお母さんは、なにしているのよ。早く早く。とせかす。今朝はそんな我儘を言っておれないのだ。ほくは魚人さんのスピードについて一生懸命足を動かした。帰って来てからは、フードと大好きな牛乳も用意をしてくれた。

「羊子の大事なトーマスだから、ほくにも大事なんだ、夕方また来るからね、留守番頼んだぞ」

そう言うと、また駆け足で帰って行つた。

ほくが犬沢家の家族になつて一番悲しい日であつた。

そうだ鳥麻子さんのお母さんのさいさんは長生きをして、九十四歳でほくより二年早く天国へ旅立つて行つた。

ほくが十三歳になったとき冬の寒さは可愛そうだと、家の中の生活が始まつた。さいさんの葬儀には、犬が家の中には参ってくれる人に迷惑をかけるからと、ほくはお父さんに言い含められて、外へ出された。

「少しの辛抱だからね」

お父さんは人の出入りが少ない裏庭に、ぼくを繋いだ。黒い服を着た人たちが大勢お参りにやってきた。家の中からは線香の香が二十四時間流れてきた。お坊さんのお経も聞こえてきた。

声の悪い坊さんだ。ぼくは、出だしを聞いただけで声量の無さを感じ取った。ぼくの声は野太いがよく透るのが自慢だ。途中で、わんわん、哭いてやろうと思ったが、お父さんが皆に恥をかくから、じっと我慢をしてむにゃむにゃ、としか聞こえてこないお経を聞いていた。しっかり者だったさいさんである。はきはき大きな声で詠んでよ。といっているだろうなあ。そんな事を考えていたら、お経はぴたりと止まった。

お母さんの「ありがとうございます」という声が聞こえ、玄関の開ける音がして坊主は帰って行った。なんと短いお経なんだ。

「あなた、時計を見ていたら一分だけのお経よ。あとは教本をさいさんの胸の上にパラリ開いて置いただけ、省略もいいとこね」

それに応えるようにお父さんが、

「あれは枕教いうて、亡くなつてすぐに読むお経だ。ぎよつ、五万円」

手に持っていた紙切れを見て思わず叫んだのだ。いつも小さいお父さんの声があまりにも大きかったので、側に座っていた人たちが思わず、振り返った。

「いや、何でもないですから」

お父さんは、そういつてお母さんの袖を引っぱって縁側に出てきた。

「たつた一分の枕教のお値段が五万円ですか」

お母さんは溜息をついた。ぼくは聞いてしまったのだ。なんていうことだ。散歩のコースにある寺が浮かんできた。それと同時に寺の飼犬の虎之助も一緒に浮んできた。勇ましい名前だけれど、顔は狸だ。たまに会つて、ぼくが、わんと挨拶すると、きゃんきゃんと挨拶を交わしてくれる。寺の裏山には狸が住んでいるそうだ。その狸と犬の雑種では？ぼくは由緒正しきビーグル犬なのだ。

いやいや、威張つては駄目だ。いつもお母さんに言われている。雑種のほうが健康で病気をしないらしい。今は雑種と言つては駄目なんだ。ミックスというそうだ。そのミックスの虎之助の寺はりっぱな本堂に庫裡が付いていて、玄関を開けると二メートル幅の廊下が奥へ続いている。お金持ちなのだ。ぼくには虎之助が狸にしか見えない。狸は化かす。枕教の五万円を虎之助に頼んでみ

ようか。五枚の木の葉を、ちちんぷいぷい、といって五万円に変えてもらおうか。いやいやそんなことは頼めない。お父さん、お金あるのかな…：ぼくをペットショップで買うときも、値下がりを待って買ったぐらいだから、大丈夫かなあ。そんなぼくの心配をお母さんは察したのか、縁側からでてきて頭を優しく撫でてくれた。

「トーマスのフードを買うお金はあるから心配しないでね」

そういいながら、お母さんは葬儀費用の心配をしていたのだ。お母さんは、さいさんの晩年の世話などすっかり疲れ果てていた。お金の心配は全部お父さんに任せてなんとか無事に葬儀は終わったが、その後の葬儀費用の請求書を見て、お母さんは床に就いてしまった。葬儀会館と寺に払った費用は二百万円を少し切っただけであつた。お父さんは、さいさんの最期を豪華に見送ってあげたかった。それで松竹梅の松の一番高い値の葬儀をしたのである。

松竹梅、まるで結婚式ではないか。結婚式は前もっていろいろ相談をして準備できるが、葬式はそうはいかない。そんな喪主の悲しさに付け込んだ寺の儲け主義に、ぼくはお母さんの心を思つて怒りに震えた。

大沢家は旧い家なので、たくさんの人が死んでいて、故人の名前を彫るスペースが墓石に無くなつてしまつた。お父さんはこの機会にと思い、新しい墓石を作ることにした。墓石屋と寺が繋がつていて、他の墓石屋さんに見積もりをとつて貰えなかつた。値のはる物を購入する場合はいろんなお店を当たつてみるのは世間一般の常識である。ましてや財布を預かる主婦では当たり前のことだ。それが出来なかつたのである。お父さんは坊主に上手く言い含められて墓石を買つてしまつた。

お母さんの怒りは頂点にたつしていたが、お父さんが、良しという言葉には逆らえないのだ。

ぼくは、お母さんの気持ちを考えると、悲しくなる。

「お母さん、ぼくの葬式は簡単でいいよ。庭に埋めてもらつたらそれでいいのだ」

お母さんはそんなぼくの気持ちを察したのか、

「お母さんも死んだら、一番安い費用でしてもらつて、トーマスの傍に一緒に埋めてもらうわね」

ぼくもお母さんもまだ死んでいないよ。お母さんの膝に手をついて、ぼくはわんわん哭いた。

お母さんは一週間ほどですっかり元気になつて、また散歩に連れ出してくれるようになった。

さいさんが居なくなつて、少し淋しくなつた。羊子お姉さんがお嫁に行き、さいさんが亡くなつて五人家族が三人になつてしまつた。

「トーマスがいてくれるので、寂しくないわ」

お母さんは、多くの頭を撫でながら言う。それでもさいさんの存在は家族の中でも大きかつたので、やはり寂しい。

さいさんは九十四歳で大往生である。高齢のための物忘れはあつたが、しっかりと書いて、延命治療はしないでほしい、と紙に書いていた。亡くなる一月前から、段々食が細り、固形物は受け付けなくなつていた。お母さんは口当たりの良いゼリーや果物を用意して、医者から勧められた栄養価の高いドリンクを根気よく食べさせていたが、それも受け付けなくなり点滴で命を長らえていた。さいさんは一か月かけて死の準備をしていたのである。食べ物をとることは、健康に命を繋ぐ大切な行為である。その大切な行為を拒み始めたことは死への準備に他ならないのだ。最期はお父さとお母さんに手を握ってもらつて息を引き取つた。あとで聞いた話だが、さいさんは首を枕の上で左右に十回ほど動かしていたが、その動きが止まり、同時に息も止まつた。その後近所の掛かりつけ

の内科の先生が聴診器を持って現れ、血圧計を出して、さいさんの腕に巻いたが、針は全く上がらず、「ご臨終です。大往生ですね」とさいさんに頭を下げた。帰るとき、「さいさん、またね」と言いかけ、あわてて「あつ、もう会えないね」と苦笑いをして帰つて行かれた。

「さいさんの最期はまるで映画のシーンみたいだったわ」

お母さんがあとでしみじみ話してくれた。

お母さんは長男の嫁の務めを果たした満足感でいっぱいのようなのだ。いつも明るいお母さんが、さいさんの死で余計に明るくなつたように思うのだ。

それから一年、また不幸が起きた。お母さんの大好きなお兄さんが七十八歳で亡くなつた。十五歳上のお兄さんは、お母さんには無くてはならない存在であつた。

見舞いに行くたびに元氣にふるまつて笑顔をまき散らしていたお兄さん、生きたい思いは誰にも負けないお兄さんであつたが、癌の病魔がその思いを断ち切つたのだ。お母さんにはお兄さんとの思い出が山ほどあつた。

ピンクのエナメルの靴は、お兄さんが東京で買つて来てくれた。お母さんの思い出の中で一番光り輝いている。田舎町の靴屋では、お目にかかれない洒落た靴であつた。飾りがなにも無く、先が丸くカーブしていて、足の

甲に当たるところに細いベルトが付いている。お母さんはその靴を履いては庭でよくダンスをしたそうである。縁側に蓄音機を置いてその音楽に合わせて踊ったのである。お母さんが踊り出すと、庭で飼っているニワトリや、アヒルが次々に寄ってきたそうだ。一度隣の家の豚が開いていた背戸から入ってきたときにはお母さんもびつくりした

流れていた音楽は「兎のダンス」であった。このレコードもお兄さんの東京土産であった。アヒルやニワトリは豚に驚いて逃げていき、豚の前でお母さんが棒立ちになつていたとき、飼い犬のコロが哭きだした。その声に豚の飼い主のおじさんがやつてきて一件落着である。

お母さんは、その話をよくしてくれた。「トーマスだって、絶対助けてくれるよね、やはり犬つて頼りになるわ」言いながらばくの頭を思い切り撫でてくれるのであった。

お母さんはときおりその靴を懐かしく思い出す。それから長い歳月が過ぎて、お母さんは時々想像するそうだ。あの靴を靴屋さんで選んでいるお兄さんの顔を。あのとさお兄さんには彼女はいなかったのだろうか。十五歳下の妹に、ピンクのエナメルの靴を選ぶお兄さん、それだ

けお兄さんに愛されていたのだろう。ぼくはそう思いながら、その話をするお母さんをじつと見つめる。

お兄さんがお母さんに最期に残した言葉は、

「ママには女兄弟がいらないから、仲良くしてやってくれ」

ママとはお兄さんの妻の牛多子さんである。普段から仲は良いが、お兄さんの死後さらに仲が良くなったそう。お母さんが、お兄さんの写真を見ながら涙を流しているのを知っている。お母さんもお兄さんを深く愛していたのであろう。

お母さんとぼくはとてもロマンチストである。二人で一番星を見てはいつも語り合った。

さんさんと輝る月の夜の庭はまるで湖水の底にでも沈んでいるようだ。ぼくは小屋を出てあまりにも美しい月夜の庭を眺めるのだ。唄い疲れたキリギリスが一匹ぼくの側に寄ってきて言うのだ。

「トーマス君も、唄ってくれよ。もしかして唄えないのかい」

「唄えない？聞き捨てならないことをいうなあ」

ぼくは歌が大好きである。家族の誰かが唄いだすと必ず一緒に唄うのだ。ほんとだよ。キリギリスは首をかしげたので、大きな声で唄い出した。「わーんわんわーん」

んわーんんわーんん」

しばらく唄っていると玄関の戸がガラリと開いた。
あつ、お母さんだ。

「トーマスどうしたの、歌なんか唄って、あら、キリギリス君もこんなところでどうしたの、もしかして二人で唄っていたの」

言いながら耳を澄ませた。

「秋だわね」

お母さんは庭で鳴く虫の音色に聞きいつている。

「あらつ、このキリギリス脚が一本無いわ」

初めて、キリギリスに脚が一本無いことに気が付いた。
「この間、紫蘇の葉を齧っていたキリギリスだわ。羽根を掴んだら脚が一本千切れてしまって、芽を出し始めた百日草の葉も食べてしまうことも、知っていたのよ、でも逃がして遣ったの、そのときのキリギリスだわ。お札に歌を唄いに来てくれたのかしら」

しゃがみこんだ途端に、キリギリスはひょいとジャンプして逃げてしまった。

それから、お母さんは「蟻とキリギリス」の話をしてくれた。

暑い日盛りをものともせず、蟻は干からびたミミズ

や死んだ蟬やお菓子の屑を運んでいる。働き者なんだなあ、蟻さんは、きつと早起きで、今頃はもうお家で寝ているに違いない。そんなことを思っていたら、大欠伸が出た。

「あらつ、トーマス眠いの、じゃあ、もう小屋に入りましょうね」

お母さんはいうと、小屋の中のバスタオルをきれいに平らに直してくれた。

ぼくは急いで小屋の中に突進していった。

「おふとんは、自分で引くからね」折角平らに引いてくれたバスタオルをぼくは自分流に四本足で何度も何度もあつちへ、こつちへまたあつちへこつちへと引っ張りながら、やつと鳥の巣のように丸くした。

「そうだったわね。トーマスは自分で寝床は作るんだっただわね」

お母さんは感心してぼくの頭を撫でてくれた。

お父さんはどうしたのかなあ、きつとお部屋でパソコンを開けているのだ。咄嗟にお兄さんの店が浮んだ。ぼくの名付け親のお兄さんは脱サラをして、S市へ帰って来てパスタとケーキのカフェを開いた。お父さんはその経理を担当しているのだ。売り上げや経費をパソコン

に入れている。真面目で几帳面なお父さんにはびつたりの仕事だ。經理の仕事ばかりではないよ。ぼくの日常生活をホームページに作って発信してくれているのだ。パソコンは世界と繋がっているのだ。そのおかげでたくさん友達ができたよ。

東京の花ちゃんのお母さんは、花ちゃんが亡くなって悲しさのあまりふさぎ込んでしまう日々だったのが、ぼくのホームページを見て元氣を取り戻した。そして新幹線に乗ってぼくに会いに来てくれたのだ。亡くなった花ちゃんは、もちろんビーグル犬で、ぼくとそっくりだったそうだ。ぼくは、花ちゃんのお母さんに頭をいっぱい撫でてもらった。花ちゃんのお母さんは、二代目花ちゃんを飼うことになった。写真を送ってくれた。会うことの叶わなかった二代目花ちゃんは大変な美犬である。

埼玉のスヌーピーちゃんは車に乗ってお父さんとお母さんに連れられて会いに来てくれた。あのときはびつくりしたなあ、スヌーピーちゃんはやはり都会の犬なんだなあ、庭に入るや否や、ぼくの肩へ手を置いたのだ。びつくりしているぼくを尻目に今度は小屋へすたこらさつさと入ってしまったのだ。家の中で暮らしているスヌーピーちゃんには犬小屋が珍しかったのだ。

京都のきゅうちゃんの家族は、前振れなく訪ねてきてくれて皆を驚かせてくれた。

二人の小学生の子供は、ぼくといっぱい遊んでくれた。ぼくの家は大人ばかりだから、小学生と遊ぶのは初めてで、犬であることを忘れて遊んだあの時間は今も鮮明に覚えているよ。小学生だったお姉さんは結婚してお兄さんは大学生になったそうだ。

お母さんは筆まめなので、メールをしたり、手紙を書いてぼくのお友達の家族とお付き合いを続けているそうだ。日本だけでなくイギリスからも、はるばるビーグル犬ラッキーちゃんのお父さんとお母さんが訪ねて来てくれた。

国際結婚をしたジョンさんとみどりさんだ。あの日は英語を習っている琴理ちゃんも参加しての夕食会だった。大好きのみどりさんはイギリスでお留守番のラッキーちゃんが恋しくなったのか、ぼくを何度も抱っこしてくれた。

ぼくが亡くなってから、イギリスのミリーちゃんのお母さんが、ぼくのお墓参りに来てくれたそうだ。イギリスの森で散歩をするミリーちゃんを持参のノートパソコンで見せてくれた。赤ずきんちゃんが出てきそうな森

だったわ。お母さんがぼくの墓前で話してくれた。

ぼくが亡くなる二十日前に東日本大震災がおきて福島では原発事故がおこった。ぼくの友達のベル君が福島には住んでいる。あの時は本当に心配した。ベル君の家族は皆無事であったが、まだ原発事故の後始末は終わっていない。四季のある自然豊かな日本が汚れていく。どうかこれから千年後も、今の美しい自然が残る日本であってほしいと、お母さんもぼくも願っている。

スヌーピーちゃんときゅうちゃんはぼくより早く亡くなった。でもみな長生きだったよ。ベル君は十七歳で、ぼくが逝ってから三年後に亡くなった。

最近お母さんは、日の過ぎるのが早い、が口癖になった。忙しすぎるのも、そう思う原因なのだろう。

お母さんはお兄さんの店の手伝いに毎日忙しくて家にいる時間が少なくなった。

「いそがしい、いそがしい」と言いながらぼくの顔を見ると、

「ああ、癒されるわ」と言って、散歩に連れ出してくれる。お母さんが店に行っている間は、お父さんは一人で淋しいのかぼくによく話かけてくれる。

お母さんは、お父さんは無口でつまらないわ、とよく

言うけれど、ぼくとはよく話をするよ。ぼくは聞き上手だからかもしれない。それに聞いた話は、他所へ行つて喋らない。お母さんはお店でもお客さんと喋るし、お友達とも電話でよく喋る。そんなお母さんを見ると、お父さんはお母さんに対して喋る気が起らなくなるのかもしれないなあ。

ぼくが犬沢家に飼われた当初は、ぼくの話題でふたりの会話も弾んで、随分夫婦仲は良くなった。それが何時ごろからであろうか、ぼくが原因で喧嘩をするようになってきた。お父さんは良く言えば真面目、悪く言えば融通が利かない、お母さんは真面目ではあるが、アバウトな性格でぼくの散歩の時間も毎日同じでなくともいいのだ。お父さんはそんなお母さんが気に入らない。お母さんは出かけることが多いが、夕方の散歩はお母さんの当番である。一人での外出はともかく、そうでないときは、自分勝手には動けない。いらいらしながら、お母さんは電車の中で、足踏みをしているようだ。足踏みをしたからといって、電車は停車駅を素通りして早く走ってくれないのになあ。

ある日お母さんはぼくの散歩の時間を気にしながら、帰途についていた。

電車の中ではずっと腕時計を見ていた。さいさんとはく怒った顔が頭のなかで揺れ続けていたそうだ。お父さんは、まだ会社勤めである。特急は最寄りの駅に止まらない。お母さんは最寄りの駅を一駅越した駅で降りた。タクシーを探したが出払ってしていない。タクシーが戻ってくるのを待っている余裕もなく、タクシーを呼ぶという考えも頭から消えていた。お母さんはショルダーバッグを幼稚園掛けにすると走り出した。歩いたら三十分はかかる道のりをマラソンの苦手なお母さんが家まで走ったのだ。箱庭のような美しいリアス式海岸の湾には真珠筏が浮かび、湾を緑の樹木が縁取るように囲んでいる。皇族の方々も何度も泊まれたS観光ホテルが湾を見下ろすように建っている。何時みても美しい景色である。いつもならのんびり景色を眺めながらぼくと散歩をするのであるが、そんな余裕はなかった。はあ、はあ、はあはあ、心臓が飛び出してきそうに胸が波打っているが、気にしている暇はない。やっと家の坂の下にたどり着いた時には十月の夕暮れ迫る時間であったが、汗びっしょりであった。時計を見たらわずか十五分で走ってきた。金木犀の香がお母さんを労わるように漂ってきた。その香りに一息ついていたら、わん、わん、わんという

哭き声と一緒に、「美兎は遅いね」というさいさんの声が聞こえてきた。

お母さんは、背筋をしゃんと伸ばして、門を入った。

「さいさん、トーマス遅くなってごめんさい」

というが早いのか、玄関にバックを放り投げ、スニーカーに履き替え、帽子を被り、ぼくのリードを掴むと走り出していた。そんなお母さんを、さいさんは目を白黒させて送り出した。

「なんでも、早いのがいいとは、限らないよ。転ばなければいいけどね」

ぼくは待ちくたびれていたので、家の前の本通りに出るとスピードを上げて走り出した。お母さんは駅から走ってきた足の疲れが収まらないまま飛び出してきたので、急にスピードを上げたぼくの力に追いつかず、足元の小石に躓いてリードを手首に巻いたまま、両手を道路にペタンとつけて転んでしまった。ぼくはドサツという音に驚いて止まるや否やお母さんの所へ戻った。

「大丈夫かい、お母さん」座り込んでしまったお母さんの顔を覗いた。お母さんは両手を擦り剥いていたが、血は出ていなかった。

手首も動くようだ。

「大丈夫よ。慌てると、ろくなことは無いわね」

言いながら、頭には、慌てないがモットーのさいさんが浮んでいた。

「見習わなければいけないわ」

お母さんは反省しきりだ。

なにをするのも早いのが、慌て者のお母さんは、ぼくが見ていてもはらはらすることしきりである。そんなお母さんとは正反對のお父さんは、仕事を定年で止めてからも、一日を時計を見ながら規則正しく過ごしている。食事のテーブルにつけば食卓のそばの壁に架けてある時計を見る。そしておもむろに箸を持つ。食事は喋らないように、さいさんから躡けられているのか、黙々と箸を動かすだけである。ぼくの話題にも飽きてしまったのか、お母さんが、ぼくのことを喋り出しても、知らん顔だ。

お母さんは趣味も多くて友達も多い。お父さんとコミュニケーションがとれなくなるとさらに趣味に没頭するようにになった。お兄さんの店の手伝いに家事にぼくの世話に趣味と、一日はめまぐるしく過ぎていく。

さいさんの介護をしている時は、お母さんが倒れないかなあ、と心配したが、介護保険のデイサービスとショートステイを利用して切り抜けた。

さいさんの楽しみは洋服を買うことである。デパートの通信販売のカタログ雑誌が郵便受けにとさつと届く。さいさんは昔からお洒落であったが、老いが進むにつれてお洒落心は萎えていくばかりであった。毎日見るのが日課になっていたカタログの雑誌にも関心を示さなくなってきた。老いは確実に進んでいた。お母さんと張り合っていたころが嘘のようである。そんなさいさんが歯がゆくて、デイサービスに出かける日は、さいさんの服装選びに心を砕いた。

頭が冴えている日のさいさんは昔のように嫌味を言ったが、その回数も減ってきた。そんな中でのお母さんの服装選びには、さいさんにとって少し癢に障るのか、折角お母さんが選んだ服を目を離したすきに脱いでしまう。

「お迎えの車が来ましたよ」

と部屋を開けてびっくり、いつの間にかちぐはぐの流行遅れの服を着ている。がっかりするお母さんを、負かした気分になるのか、

「さあ、車が待っているんだろ。突っ立っていないで、どいて、どいて」

と、靴を履くのである。

幼稚園に出かける子供のカバンに、ハンカチ、チリ紙、先生との連絡手帳を確認した時代を思い出しながら、さいさんのカバンの中身を点検する。薬手帳、血圧に熱を記載するノート、介護士さんとの連絡ノート、ハンカチ、チリ紙忘れ物はない。やっと安心して流行遅れの服を着たさいさんを、迎えるバスに乗せ、よろしくお願いします。と頭を下げる。車が発車するのを見届けて一息つく。帰宅する四時までの時間を気にしながら一日が始まるのであった。糖尿病を患っていたさいさんは始終お腹を空かせていた。さいさんの食欲の思うままに食べさせていれば、血糖値はたちまち上がって、医者に叱られるのはお母さんである。

さいさんは冷蔵庫に首を突っ込んで食べ物を探す。そんな姿を見るのは辛い。

心を鬼にして関心を食べ物から反らす工夫をした。大相撲中継がある週は、二人でテレビを見て応援する。力士に詳しいさいさんは、お母さんの解説者である。

店で働いていても、さいさんのことが気になるので、ランチが終わるのを見はからってバイクを飛ばして帰ってくる。昔話は好きで、さいさんは小学校や女学校の話を食べ飽きずに何度も話す。女学校のころ履いていた上靴が

今も下駄箱にあると言うので、お母さんは見てみたが、最近買った室内履きの白い靴しかない。それが女学校時代の上靴だと思い込んでいたさいさんの思い出を壊しては気の毒である。

「物を大事にするのは、いいことですね」と話すことにしている。

ぼくとさいさんは仲良しである。デイサービスから帰ってくるさいさんを尻尾を振って出迎える。散歩に出かける前の少しの時間を、ぼくはさいさんにサービスをする。お父さんの日曜大工の作品の簀子の上でごろっと転がってお腹を出す。さいさんはしゃがみこんでぼくのお腹をさすったり、長い耳を上げたり降ろしたりして、いろんなことを話す。

「トーマスも、おじいさんになつたらデイサービスに行くのかい。みんなでお遊戯したり歌を唄ったり、塗り絵をぬったり、まるで幼稚園だよ。あんまり楽しくないけど、家にいると美兎に迷惑かけるから、行ってるんだよ、でも友達もできたし、お喋りは楽しいよ」

隣のたった一人の友達が亡くなってから、さいさんは同年代のお婆さんと喋る機会も無かったので、施設ではお喋りが楽しそうである。

デイサービスから帰ってきたさいさんのカバンを開けるのは、お母さんの楽しみでもあった。家では一日テレビを付けて通信販売のカタログ雑誌を広げているだけのさいさんが、デイサービスでは塗り絵やハンカチへ刺繍をしたり、写真立てを作ってくるのである。手の器用なさいさんは和裁洋裁編み物染色など若いころはそれはそれは上手に遣っていた。何もする気がおこらなかったさいさんが作ってくる作品を見るのは心が和む。大勢の仲間のおかげである。

デイサービスに行くのを嫌がったさいさんであったが、九十歳にしてやっと老後の楽しみをみつけたのだ。毎月一回の病院への検診で、デイサービスの友達と会ったときのさいさんの様子をぼくは聞いている。

「さいさんはね。浮かない顔で待合室の椅子に座っていたの。でも一人のお婆さんが入ってきたら、すっと立って駆け寄るや否や抱き付いているのよ。慌てるのが大嫌いなさいさんのあの時の素早い行動にはびっくりしたわよ、トーマス」お母さんは興奮して喋る。

「そつ、そうかい、分かったよ。そんなに近寄って喋ると、耳が痛いよ」

お母さんは、嫌がるさいさんをデイサービスに行かし

たのを案じていたのですっかり安心したのであろう。

お母さんが趣味の短歌の会の集まりで泊りで出かけるときは、ショートステイと言って、短い泊りをさいさんにお願ひした。他所へ泊るのが嫌いなさいさんは頑として聞いてくれなかった。ぼくは言ったのだ。

「さいさん、ぼくもお父さんとお母さんが旅行に行けば、嫌でもペットホテルに泊まるんだよ。だって一人では散歩もできないし、食事も貰えないもん。いつも世話掛けているんだから、たまにはお母さんも休ませてあげようよ」

「そうかもしれないね。いつも美兎には世話をかけっぱなしなんだものね」

ぼくの白いお腹を撫でながら、さいさんは納得してくれた。

庭の四季咲きの薔薇を切ろうと背伸びして、足元をふらつかせ転んでから、さいさんの老いは急速に進んでいた。あのとき家にはぼくしかいなくて、慌てたが、気丈なさいさんは徒歩五分の内科医に乳母車を押して傷口を診てもらいに行った。その時の様子を一部始終見ていたのはぼくだけだ。ぼくもついて行きたかったが、なにしろ繋がれている身だから、無事に帰ってくるのをひ

たすら折ったのだ。

さいさんは頭が働くほうで、転んだ時も咄嗟に物干し竿を掛ける鉄の棒を掴んで体を横にして倒れたのだ。ぼくは見ていて驚いたなあ。真後ろに倒れていたら頭のと真ん中を打っていたからなあ。

さいさんの老化現象ばかり目につくのは、自分の老いを気に仕出したからだだろう。心臓が悪くなり、夏には散歩から帰ってくると、息遣いが荒く、はあ、はあ、はあ、と落ち着くまで大変なんだ。お母さんは、トーマス大袈裟ね、そんなにしんどいの？なんて言うけれど、嘘で、はあはあ、なんて言えないよ。

それに耳が少しづつ聞こえなくなり、また目も白内障が少し出てきたのだ。人間の老化現象と同じなんだ。でも食欲だけは一向に衰えないから、元気にしていられるのだ。散歩も決して休まないから足腰は丈夫だよ。今でも筋肉隆々の体つきなのだ。

病気になるたことのないぼくだけど、散歩仲間の犬に三回も咬まれたのだ。一回は傷口が深くて肺まで届く大怪我だったのだよ。ぼくは家族の皆には大切にされているのだが、やはり犬のお友達が欲しいのだ。散歩に出ると、他所の家の犬と出くわす。

怪我の一回目はラブラドルの大型犬と出くわして、友達になりたくて頭を相手の犬のお腹の下に潜り込んだら、がぶつ、と咬まれてびっくりした。

肺に届く大怪我は、お兄さんと散歩している時であった。飼い主が居なくてリードを付けたまま走ってきた犬に逃げる暇もなくてがぶり、と咬みつかれた。咄嗟のことで慌てたお兄さんは、その犬のリードを力いっぱい引っ張ったが、ぼくの背中から離れない、痛さのあまり、ぼくはもう死ぬかと思って悲痛な声をあげた。その声を聞きつけて、通りかかった自動車から人が降りてきた。その人はお兄さんと一緒にリードを引っ張ってくれ、九死に一生を得たのだ。その犬は反対方向に走って行つたが、散歩をするときは人が付いていてくれなければ大迷惑だ。犬にもいろいろ性格があつて咬まない犬もいるけれど、咬むことを前提に考えてもらいたいものだ。三回目、と書くことよく咬まれる犬だなあ、とバカにされるかもしれないけれど、それでもかまわないから、ぼくは書くのだ。

散歩に行かない犬の家の前での出来事であった。繋がれているから大丈夫だと思つていたのが間違ひであった。いつもうれしそうに散歩をするぼくを毎日羨ましく

見ていたのだ。

ある日ぼくがその家の前に差し掛かると、小屋の前に敷いてある犬一匹が座れるほどの敷物を口で銜え、振り回しているではないか。嫌な予感がした。お父さんもそう思ったのか、足早に通り過ぎようとした時であった。その犬が鎖を切って一目散に突進してきたのだ。ぼくは恐ろしくて足が竦んでしまった。お父さんがぼくのリードを引っ張っても走れないのだ。「トーマス」普段声の小さいお父さんが、大声を張り上げた。ぼくはその犬に無残にもお尻を咬まれてしまったのだ。ぼくを庇ったお父さんも腕を咬まれてしまった。騒ぎを聞きつけた家の人が出てきてなんとか収まったが、ぼくは腰を抜かしてしまった。

いつもの女性の獣医さんが「トーマス、かわいそうに」と言いながら傷の手当をしてくれた。ぼくの大好きな色白の美人先生だ。ぼくは痛いのも忘れて恥ずかしさに治療台の灰色のビニールをひたすら見ていたのだ。

ぼくに咬みついたその犬を、保健所に連れて行くと言って、謝りに来たが、繋ぎっぱなしで散歩に連れて行かない飼い主が悪いのだ。飼い主が刑を受ければいいのだ。

お母さんは、そんなかわいそうなことはほしと涙ながらに頼んだが、犬の世話に辟易していたのか、この事件を幸いにでも思ったのか、その犬は保健所に連れて行かれた。別の理由で連れて行かれた犬も知っているよ。その犬は雌犬で発情期に雄犬が寄って来てうるさいから、という理由なのだ。これも飼い主の勝手だ。犬を飼ったなら飼い主に責任があるのだ。ぬいぐるみではないのだ。生き物には命が宿っているのだ。物は言えないけど感情もちゃんとある。そんなことをする飼い主には、きつと天罰が降る。表現は悪いが、ぼくはそんな気がするよ。犬の代表で言わせてもらったよ。

いろんなことがあったなあ。ぼくの頭には天国への道を歩きながら次から次ぎへ思い出が吹き出してくる。

十四歳の時、ぼくは免疫力が低下していたのかダニにやられてしまった。犬は生まれたときからダニを持っているそうだ。そのダニは健康体には出てこないのであるが、やはり加齢で出てきてしまったのだ。出ない犬もたくさんいるそうだ。美人先生が、「よりにもよってこの歳で出てしまって、気の毒だわ」と言われたのだ。このダニが命取りになろうとは、だれもそのときは思っていないかった。治療に専念してもダニを撲滅させることは出

来なかった。

お母さんは今まで以上にぼくの寢床のタオルや毛布を洗濯しては太陽に干してくれた。体も洗ってくれた。温泉がいいと聞き、知人に頼んで草津の温泉の湯をペットボトルで送つても貰った。一年間お母さんは、さいさんの介護と同じようにぼくの世話をしてくれた。薬嫌いなお母さんであつたが、今回だけはきちんと飲ませてくれた。ぼくが嫌がるとウインナーやハムにも入れてくれたよ。寒いときは湯たんぽもエアコンも入れてくれた。お母さんの介護を思い出すと涙が出て来るよ。でもぼくも必死に頑張った。トイレもおもらしはしなかったよ。最後の最後まで散歩も頑張った。寝たきりにはならなかった。おむつも買つてもらつたが一回もしなかったよ。ぼくは毎日散歩をしたおかげで足腰が頑丈になつていた。長く飲み続けた薬の副作用で貧血になつていて体がだるくてたまらなかつたが、亡くなる一日前まで散歩をした。ぼくは亡くなる一年前から大好きなお父さんの日当りのよい部屋でパソコンをするお父さんの横で過ごしたんだ。ぼくが買われてきたとき、お父さんが設計図を引いて建ててくれた小屋は主が居なくて寂しそつであつた。お父さんとお母さんの二人から有り余る愛情を注いでも

らつてぼくは逝つた。お母さんの望むようにもう二、三年長生きをしたかつたが、犬にも寿命があるのだ。お父さんお母さんごめんさい。ぼくはもう寿命がつきたのだ。でも最後まで頑張つたのだ。お母さんはぼくの命が消えるとき一緒にいてやれなかつたと、泣き伏したが、夜中にトイレに行こうと倒れたぼくを抱き起してくれたよ。ね。湯たんぽも入れなおしてくれたよ。ね。あのときぼくはお母さんにちゃんとお別れをしたのだ。泣かないでくれ。お父さんお母さんありがとう。幸せいっぱい的一生だつたよ。ぼくが逝つてもう三年過ぎたよ。ね。お母さんはやつとぼくのことを書く元氣が出たのだ。ね。もう泣かないでね。ぼくは天国でお父さんお母さんを見守っているからね。

大沢家の皆のこと考え歩いていたらもう天国の入口が見えてきたよ。入口が光で明るいよ。友達のはなちゃんにスヌーピーちゃん、きゅうちゃんも、あれつ、尻尾を振つてくれている。急がなくっちゃ。さいさんにも会いたいなあ。悪いけどお父さんお母さん、ぼくは行くからね。元氣でいてね。さようなら。

完